



TITLE:

学会抄録 日本泌尿器科学会第8回 中部地方会

AUTHOR(S):

CITATION:

学会抄録 日本泌尿器科学会第8回中部地方会. 泌尿器科紀要 1958, 4(3): 172-182

ISSUE DATE:

1958-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111578>

RIGHT:

学 会 抄 録

日本泌尿器科学会

第 8 回中部地方会

昭和32年11月 3 日

於 大阪市大医学部

特 別 講 演

I 尿路カンジダ症に就て 大阪市大助教授
田村峯雄

1). 尿中 Ca. 検出とその意義: 真菌類の人体侵襲の記載は古く 1839 年 Langenboeck 以来各科領域に亘ってその報告を見る。各種抗生剤に抵抗する膿尿患者 56 例の中 Ca. を証明したもの 14 例に就て次のことを観察した。性別では女子に、年齢別では比較的高年者に多く、泌尿器疾患別では慢性膀胱炎に多く、急性膀胱炎、腎盂炎、尿道炎に於ても Ca. を証明した。又尿路 Ca. の検出は抗生物質使用群では非使用群に比してはるかに高率を示した。これらの患者ではそれぞれ尿路以外の臓器に於て Ca. を検出し、その%は健康人に於ける検出率に比してはるかに高率である。

2). 尿路 Ca. 症の臨床: 我々の得た尿路 Ca. 症は所謂続発性 Ca. 症であつて、多く慢性炎症症状を有し、侵襲部位は尿道、膀胱、腎盂に局限した。分離した Ca. は *albicans* が多く、その他の Ca. も同定せられた。

本症発病の要因として、栄養障害、衰弱、手術的侵襲等の個体的要因が認められる。

3). Ca. の同定試験: Ca. 同定試験の實際を説明し Martin et Jone の分類法を示した。

4). 尿路分離 Ca. の抗生物質に対する感受性に就て: 2 つの試験によつて 5 種の抗生物質は尿路分離 Ca. の全てに対して発育促進的に作用することが認められた。

5). 尿路分離 Ca. の病原性に就て: 色素吸収能によつて細菌の毒性を判定する Epstein の方法を Ca. の病原性判定試験に応用した。この試験の結果尿路分離 Ca. では色素吸収能は大体臨床症状に平行して強い傾向が見られた。

6). 尿路 Ca. 症の治療: 尿路 Ca. 症の 17 例に就て Trichomycin 内服錠による治療の結果をのべ、2 例の患者では Trichomycin とケミセチンとの交互投与によつて明かに病巣に於て、大腸菌と Ca. の間に菌

II 非淋菌性尿道炎 大阪通信泌尿器科部長
山本 弘

交代現象が認められた。

1). 発生頻度: 昭和 28 年 1 月以降同 32 年 9 月に至る 4 年 9 月の大阪通信病院泌尿器科に於ける男子尿道炎 538 例中、淋疾 230 例 (42.8%) に対し非淋菌性尿道炎 (NGU) は 308 例 (57.2%) を示し、NGU は淋疾を少々凌駕する。NGU 中細菌性 224 例 (73%)、無菌性は 84 例 (27%) にして、計 308 例中再発もしくは再感染数は 71 例 (23%) の多数に認められた。NGU の逐年増加の中には、相当数の再発例が含まれることを指摘した。

2). 細菌性尿道炎を論じ、NGU 尿道分泌物の塗抹標本に於ける Gram 陰性短桿菌及び coccobacillary form の細胞内存在を 2, 3 標本によつて供覧し、之等細菌と NGU の関係を示唆した。

3). NGU と virus との関係に就き文献的考察を行い、virus 封入体を自験例によつて供覧した。NGU の尿道 scraping に於ける virus 封入体は 173 例中 3.5 % に示され、細菌性に比し無菌性に於てより多く発見出来ることを述べた。

4). NGU と PPLO との関係に就き、自験成績を次の如く要約した。

(i). 昭和 29 年以降現在に至る PPLO 分離計 51 株の内訳は、NGU 31 株 12.1% (細菌性 8.8%, 無菌性 20%)、正常尿道 4 株 13.3%、産婦人科外来患者 10 株、30.3% である。之は諸文献の分離頻度に略々一致する。但し注目すべき点として、PPLO が無菌性に高頻度に分離されること及び夥多純培養は殆んど無菌性に限られる事実を挙げた。

(ii). Edward 提唱の分類法により、自験株は何れも type I に属する非病原株であることが推定された。

(iii). 各種抗生物質に対する感受性試験によつて、PPLO が Terramycin, Streptomycin 等に高度の感受性を有するという既存文献を確認し、Achromy-

cin の最小発育阻止濃度0.1~1.0mcg/ml を新しく追加した。更に PPLO 分離症例に対する各種抗生物質の臨床成績は、略々 in vitro の感受性を裏書することを述べた。

(iv). 所謂 PPLO 封入体を2, 3標本によつて示し、之は PPLO 自体の組織相であるとする仮説に賛意を表した。

(V). その塗抹標本に於て Gram 陰性桿菌の細胞内介在を示した PPLO 分離症例の2例に就き、培地に於ける発育を時間的に観察した。この観察に基づき、或種の Gram 陰性桿菌との間に、何等かの関連があることを推定した。

5). 腔トリコモナス男子尿道炎に関する最近の動向を述べ、NGU の治療に言及した。

一 般 演 題

1. スルファメチゾール (ウロサイダル・エーザイ及びメルファ、田辺) による尿路感染症治療 田村峯雄・山口武津雄・品川 猛 (大阪市大)

本剤は吸収、排泄が速かで酢化の率が少なく、広い pH に於て尿によく溶解し、強い抗菌力を持つサルファ剤であることを確認した。急性膀胱炎21例では1日量2g×4~8日、又は1日量3g×4~8日の投与で全例治癒した。慢性膀胱炎及び腎盂炎の16例では1日量3g×6~21日の投与で、著効治癒8例、有効5例、無効3例の成績であつた。

2. 尿路感染症に対するウロサイダルの治療 近藤 厚・石山勝蔵・渡辺 克・篠田 孝・尾関信彦・友松滋夫 (岐阜医大) 泌尿紀要4巻2号参照。

3. 尿路感染症に対する Urocydal の治療 楠 隆光・馬場正次・井本勢太郎・岩佐賢三 (阪大)

新サルファ剤 Urocydal を尿路感染症に使用し、(1)腸管よりの吸収が良好で少量の服用で比較的速かに高い血中濃度に達し、アセチル化率も低いことを知つた。(2)試験管内試験においてはかなりの抗菌力を示し、特に変形菌に対してもブドウ球菌、大腸菌に対すると同程度の抗菌力を呈したことは従来のサルファ剤、抗生物質に見られない特徴と考えられる。(3)急性、慢性膀胱炎21例、前立腺炎5例、急性淋菌性尿道炎3例、単純性尿道炎5例、その他6例計40例に使用した臨床成績は、一般の化学療法剤の奏効する症例には有効であることは勿論、変形菌感染を有する慢性疾患に

対しても、泌尿器科的局所療法を併用することなしに良好効果を収めた。唯淋菌性尿道炎においては急速の効果が見られなかつた。

追 加 前田 明 (京府大)

Urocydal の使用成績を追加する。慢性腎盂炎2例、急性膀胱炎6例、慢性膀胱炎4例、単純性尿道炎7例の計19例に1日2~3g、3~14日使用、効果不明の6例を除き、何れも他覚的に自覚的所見の改善をみ、副作用はなかつた。

追 加 近小弥太 (金大)

Urocydal は試験管内では他のサルファ剤の3~5倍の大腸菌に対する抗菌作用があり5mg/ccにて完全に発育阻止を見る。34例の尿路感染症に本剤を使用し28例に効果を認めた。特に大腸菌性膀胱炎には約85%に効果を認め、起炎菌消失迄は平均10.8日、平均投与量15.8gを要した。腎及び腎盂疾患では膀胱炎患者の約2.5倍量、平均28.5gを要し6例中4例に効を認めた。副作用は6例に認めたが何れも軽微又は一過性のものであつた。

追 加 後藤 薫・日野 豪・杉山喜一 (京大)
泌尿紀要3巻7号、及び4巻2号参照。

4. 泌尿器感染症に対するアクロマイシンVの使用 経験 楠 隆光・前川正信・野村真一・糸井莊三 (阪大)

Cross over study により本剤の血中濃度を塩酸テトラサイクリンと比較し、その約1.5倍に達することを知つた。次に試験管内抗菌力を、阪大泌尿器科患者の感染尿路より分離したブドウ球菌、大腸菌、A.aerogenes、変形菌、緑膿菌について検し、泌尿器感染症の大部分を占めるブドウ球菌9株中6株、大腸菌13株中8株を5mcg/ccで抑制した。変形菌及び緑膿菌の大部分は50mcg/cc以上の耐性を示した。34例の泌尿器感染症に使用し、治癒24例、軽快9例、無効1例を得た。副作用は全例に於いて認めなかつた。分離菌の感性、血中濃度より考え、投与方法は1日1g、4回分服で充分で、すぐれた抗菌性製剤である。

5. 非淋菌性尿道炎に対する Trichomycin, Chloramphenicol の併用効果について 石神襄次・高木俊徳・山本 治 (大阪医大)

非淋菌性尿道炎の原因及び治療に関しては未だ不明の現状である。本症の原因には PPLO を始めとして、Candida, Virus, Allergie 性等がある。又抗生

物質の普及と共に尿路 *Candida* 症の増加をみる。本症ではこれらの病原菌は単一でなく、多くは種々の菌種の混在を認む。この場合、糸状菌と細菌とが菌交代現象を呈し、抗生物質の投与が更に本現象を増加すると考え、Trichomycin, Chloramphenicol の併用を試みた。本症の28例に1日量 Trichomycin 20~40万単位, Chloramphenicol 1.0 gを同時に3~10日間投与し、著効10例、有効10例、無効8例の成績を得、全例に何等副作用は認めなかつた。

6. 所謂「非淋菌性尿道炎」患者の臨床像並びに細菌叢について (第一報) 加藤 勲・大野 幸・加藤 皖 (愛知県立中村)

余等は昭和28年以來愛知県立中村病院及び名古屋市内性病診療所に於て経験した淋疾並びに非淋菌性尿道炎男子患者の臨床的観察を行つて来た。昭和31年10月以降32年8月までに来院した所謂非淋菌性尿道炎患者207名について総括すると 1) 本病患者は年々増加しているが急性淋症患者も多数認められ、最近その比はほぼ半ばする。2) 後淋疾性または性交性原発性と思われるものが大部分で、抗生物質が濫用される現状では本病発生機序に淋疾がはたす役割を全く度外視出来ない。3) 培養上ブドウ球菌、連鎖球菌、その他10数種の菌を証明し得たが特定の菌に原因を求めることは困難である。

追 加 大熊博雄 (日大)

難治な男子 NGU 20数例の尿道圧出液及び前立腺液を Gimsa 染色で鏡検し、細胞内に封入体を3例に検出した。これらは inclusion cavity を有し Pass 染色陽性であった。又同様な染色で Shep-arel の報告と同じ所見の PPLO と思われるものを染出しえた。之等は PPLO 培養陽性であった。

7. 尿道炎患者尿道分泌物よりの *Candida* 検出率について 大熊博雄・山本忠治郎 (日大)

排膿、排尿痛、尿濁等を主症状として来院した男子急、慢性尿道炎患者73例の尿道分泌物より *Candida albicans* の検出を企図し、その陽性率及び同時に検出された他の細菌並びに各種抗生物質による治療歴との関係、陽性者の臨床症状と治療経過等に関し検索した。その結果 *C. albicans* は73例中6例即ち8.2%に証され、われわれが前回検索した30例中4例即ち13.3%に比し多少低率を示したが、本邦文献とわれわれの調査結果からみて、一般に尿道炎患者尿道分泌物よりの *C. albicans* 検出率は大体10%前後と推定され

る。

8. 腫瘍状を呈せる膀胱周囲膿瘍の3例 寺田 稔・宮林俊男 (富山市民)

症例は31才、48才、39才何れも家婦、主訴は第1例は頻尿と排尿痛、他の2例はその外に血尿と下腹部痛、時々微熱がある。膀胱鏡、触診並にレ線所見で後壁から頂部にかけて手拳大乃至それ以上の腫瘤が膀胱周囲より膀胱内に突隆しているのを認む。腹膜、腸管、大網等の癒着を切離し何れも膀胱部分切除術を行つた。組織学的に肉芽組織の増殖の強い炎症細胞の浸潤、所々膿瘍形成あり、3例共に以前に下腹部開腹術の病歴あり、特に第3例に於て腫瘤中にガーゼを認む。発生原因として何れも以前の手術と関係あるものと思われる。

9. 軟結石を合併した尿石症の1例 中尾知足・池田太郎 (関西電力病院)

患者は19才。31年8/VIII 初診。30/VIII 左腎盂より普通の尿酸塩結石摘出。術後左腎瘻を生じ 11/XII 左腎切除。32年18/I 右腎部に米粒大淡陰影10ヶ余り生じており、27/III 無尿症を起す。右腎のほか右尿管下部に結石陰影あり尿管及び腎盂切石術にて10数ヶの軟結石を摘出した。軟い小豆大までの小塊で微細な砂を含み灰白色で、中空或は膜状のものもあり、層状構造を有す。無尿症の再発を考慮して右腎瘻を設けた。27/V 右腎に多数の結石の再生を認む。5/IX 無尿症起り右腎瘻より尿溢し始まり、5/IX 普通の硬結石が自然排出され腎瘻よりの尿溢し止る。26/IX~30/X 1% Tetrasodium ethylenediamine tetraacetate 水溶液を腎瘻より注入した。この間に普通の硬結石3ヶ自然排出された。今後線維素溶解剤を注入する予定。詳細は原著に発表する。

10. 腎膀胱結石に膀胱癌を併発した1例 矢野 登・森 幸夫 (三重大)

56才の男子に見られた左腎珊瑚様結石兼膀胱結石を共存する膀胱癌の1例を経験した。結石は腎及び膀胱共、磷酸及び炭酸カルシウムを主成分とする。膀胱及び腎盂には特に粘膜のロイコプラキエを思わせるものは無く、結石と癌との因果関係を証明することは難かしい例であった。膀胱全剝離尿管皮膚移植術及び左腎剝出術を施行、退院した。

追 加 瀬川陽一 (和歌山医大)

症例1. 62才男子で主訴は頻尿と血尿。膀胱鏡所見

としては左尿管口上部に拇指頭大の乳頭状腫瘍があり、腎部単純レ線像で左珊瑚樹様結石があつた。腎切除術後膀胱腫瘍部にラドン針打込を施行した。術後診断は左珊瑚樹様結石兼腎孟白板症兼膀胱癌。尚本症の様な三者の合併した症例は1929年 Patch が報告して以来未だ報告を見ない様である。

症例2. 56才女子、主訴は血尿。左尿管口の腫瘍と左珊瑚樹様結石を認める。治療は膀胱全切除術、右腰部尿管瘻造設術、左腎切除術を施行。

追 加 大村順一 (岡大)

結石の分析により、上部尿路結石が下降したものであれば碳酸石灰が主成分であり、これがなければ膀胱に原発性の結石と考えてよいのではないか。結石と腫瘍との関係については決定出来ないが、腫瘍の構造が参考となる。

答 矢野 登 (三重大)

結石は炭酸石灰、磷酸石灰が主成分であります。膀胱癌周囲にはあまり炎症性変化を認めておりません。

11. 男子膀胱後腔に発生せる興味ある悪性腫瘍の1例 石川昌義・飯田正男 (奈良医大)

25才男子、数日に一回の便秘及び Cealic & Stroominger 様症状を訴えて来院。恥骨上部、正中線左寄りに小児頭大の腫瘍があり、境界明らかなで皮膚と癒合せず、試験的穿刺で静脈より採血するが如く容易に暗赤色血様内容を得。肛門指診で下部の前立腺とは境界明らかな弾力性軟の腫瘍を触知出来る。直腸、膀胱粘膜は正常なれど周囲よりの圧迫像を造影術により得。尿、血液、肝の諸検査成績は殆んど異常なし。精囊腫瘍の疑いで開腹。膀胱後腔に腹膜と癒着せる小児頭大の暗赤色表面滑な髄様の軟き腫瘍あり、両側精囊は該腫瘍下部内に位置する。中心部は壊死と出血を伴う。術後レントゲン療法を施行し、現在2ヶ月半経過するも再発転移の兆候なし。組織学的に malignant mesothelioma の solitary mixed type と思われる。malignant mesothelioma は稀有な疾患に属し文献上吾々の調査せる範囲では膀胱後腔に発生せるものを見ない。

追 加 前川正信 (阪大)

30才、♂。左下肢の神経痛様疼痛を主訴として、整形外科で Laminektomie を受けたが脊椎に所見なく、徐々に遷延性排尿が加わり、当科で検索の結果左骨盤腔内に発育する腫瘍があり、興味ある urogram

を呈した。試験的開腹術の結果、前立腺左葉部附近より広基性に発育した膀胱後腔腫瘍で、組織学的には線維肉腫であつた。

質 問 酒徳治三郎 (京大)

精囊レ線撮影法施行の有無。

答 飯田正男 (奈良医大)

精囊レ線撮影は行いませんでした。

12. 尿管断端に原発せる移行上皮癌剖検例 近小弥太・津川竜三 (金大)

69才、男子に於て、3年前腎摘出術を受け、約6ヶ月迄は無症状に経過したが、入院時は左側腹部に腫瘍を認め、40日の経過をもつて死亡せる患者の剖検例である。腫瘍は後腹膜腔を占め、病理学的に明かに未熟性の移行上皮癌であり、その発生母地は腎摘出術後に於ける尿管断端部しか考えられず、主として腫瘍は後腹膜腔の粗鬆結合織内に拡がり約1600g、人頭大の腫瘍を形成したものである。転移部は尿管内面及び膀胱表層部にあつて、その細胞も上記のものと一致し明かに上部よりの Implantation と思われる極めて稀な症例であつた。

13. 小児腎腫瘍の1例 森 秋津・南川清海 (神戸医大)

5才女児、右側腹部に2ヶ月来急速に発育した、無痛性、可動性小児頭大の腫瘍。臨床検査、排泄性腎盂像等により右腎腫瘍の疑いで腎摘除術を行つた。摘出腎は大きさ $13 \times 10.5 \times 8.5$ cm、重量570g。剖面は一般に脳組織様、所々に出血巣を認め、一部に正常腎組織を残し、腫瘍部と明らかに境されている組織学的には腫瘍部は不完全な小管腔の多数形成を見る。その腺細胞はクロマチンに富んだ核を有する大形細胞であり配列はみだれ2~3層、更に多層をなす これを取り囲んで間葉性細胞と思われる橢円形、紡錘形の小型細胞充満し、炎症性細胞がその間に散在す。少数の筋肉線維も認められた。腫瘍部を取り囲み結合組織線維の増殖をみる。臨床及び組織学的所見より Wilms' Tumor と診断した。

追 加 宮崎 重 (京大)

Wilms' Tumor の手術に際しては本腫瘍の転移性が大なる点から、Para-rectal transperitoneal nephrectomy を行うのが患者の予後の上から推奨すべきものとする。又 Wilms' Tumor は Radio-sensitive Tumor であるから術前の Irradiation に

は相反する二説があるが、術後の X-Ray Irradiation は一般的に言つて本症の予後を 10%向上されると言われている。

追 加 楠 隆光 (阪大)

腎腫瘍の手術の場合は出来るだけ早期に腎茎部に達してこれを処理するのは理想であるが、実際問題として腫瘍が相当発育してしまった場合にはそれを施行し得ない場合が少くない。

質 問 桜根好之助 (大阪市大)

アデノサルコムと云うものも病理学上存在するものが御教示を乞う。

14. 辜丸肉腫例 沖田和男・高石喜次 (京府大)

辻脇某, 70才, 瓦商。家族史に癌, 結核等なく34才の時に梅毒に感染, 相当期間緊梅毒療法をうけた。約2ヶ月前から認むべき原因なく右辜丸の腫脹に気づいたが自覚症はない。診るに泌尿器系統には触診上異常なく鼠径淋巴腺腫脹もないが, 右辜丸が鶏卵大, 弾力性硬に腫大し皮膚との癒着なく圧痛もなく副辜丸は明かに区別出来る。精管にも異常はない。血液像正常, 尿中マイーネーテスト(-), 17KS 正常, 梅毒血清反応強陽性, 髄液に異常はない。以上より辜丸ゴム腫かも知れないが, 組織学的検索をせんが為に右辜丸剔除を行った。辜丸は重量 200 g, 剖面は灰黄色, 充実性で出血, 壊死はない。組織学的には H・E 染色によると辜丸は殆ど全部腫瘍細胞に占められ, 所々に精細管が島状に見られるに止まり, 各腫瘍細胞は原形質に乏しく核はやや大小不同を呈し分裂像が多数見られ, 銀染色によると嗜銀線維は腫瘍細胞間に細かく侵入して蜂窩状構造を作る傾向は見られない。精管に沿つて珠数様に腫張したリンパ腺は殆んど全く腫瘍細胞で満たされていた。この様な肉腫様増殖を示す辜丸腫瘍としては Teratoma, Embryonal carcinoma の未分化となつたもの, 又未分化な Seminoma, Leydig cell tumor も考へられるが病理組織学的に見ると肉腫とするのが最も妥当な所見であつた。

15. Zn^{65} による前立腺腫瘍の治療に就いて

清水圭三・三矢英輔・瀬川昭夫・前川 昭・紫衍欽 (名大)

亜鉛の生体内自然分布の概念拡大と前立腺疾患の診断と治療に放射性亜鉛使用の可能性を研究する為、吾々は先づ $50 \mu\text{c}$ の Zn^{65} を白鼠に静注し、その体内分布状態を探究、更に血中濃度の時間的变化を追究し、

亜鉛の臓器と血液濃度の割合を計算し比較的多量に前立腺に含有される事を認めた。此の結果から吾々は $50 \mu\text{c} \sim 100 \mu\text{c}$ を前立腺癌或は肥大症患者に静注して治療に応用、現在その成果を検討中である。更に切除前立腺標本から Autoradiography も併せ施行した。

16. 症例追加 (1) 結核性嚢状腎の1例 (2) 腎被膜下血腫及び腎性高血圧を来した尿管結石の1例 藤田幸雄・興村哲郎 (福井市藤田病院)

(1). 23才女, 左腎腫瘍を主訴。尿清澄, 膀胱内景正常なるも右尿管口哆開し, 青排泄は右17分で薄く, 左排泄なし。スギウロンにて右腎は水腫状で, 左腎の描出なし。剔出腎は 728 g で腎実質全く消失し, 内容は白濁せる 505 cc の液にて満され結核菌を認む。

(2). 18才女。右側腹痛及び血尿を主訴。尿管カテテルは右 10 cm でつかえ, 右の青排泄なく, 左は正常。レ線単純にて右腎部に縦に長い楕円形の影を認め, スギウロンでは左腎孟像正常なるも, 右側では像描出なく, 腎の腫大が目立つ。手術的に尿管結石を摘出, その際腎被膜下に約 40 cc の血腫を認めた。術前152の血圧が術後 108に低下している。組織像は腎炎, 間質の細胞浸潤, 腎小動脈の内膜増生を示す。

追 加 楠 隆光 (阪大)

腎部に出血する際に非常に高度なれば renale Apoplexie となり, 極く僅少なれば吸収されてしまう。その中間だと腎被膜下血腫となり, 外部なれば encysted hematoma となる訳である。同様に血液の代りに尿の場合は多量なれば尿浸潤となり, 吸収されるには多すぎる時には perirenal or pararenal cyst となる。ここに夫々の各1例を追加する。

追 加 杉本雄三・平野 巖 (大和高田市市民)

単腎に発生せる $9 \times 1.5 \text{ cm}$, 23 g の巨大なる尿管結石の1例を追加した。詳細は泌尿紀要 4巻 3号 参照。

17. 最近の尿路結核 多田 茂・今中千秋 (三重大)

最近1年間に当科に於て腎摘除術を施行した26例の尿路結核症例に就て報告した。26例中所謂三大症候を有するものは12例46%で, 残り14例中1例の頻尿を除いて他は膀胱症状を訴えなかつたものである。血尿は4例, 尿濁濁は9例である。膀胱に中等度の潰瘍性の

変化を有しながら然も膀胱症状を訴えないものが3例存在した。又興味ある症例として右腎石症の診断の下に手術しその後各種の検査の結果腎結核の確定した症例、及び膀胱腫瘍の疑いで膀胱腫瘍及び前立腺の試験切片をとつてみると、膀胱部には結核性又は腫瘍性の変化をみとめず前立腺切片は定型的結核の像を示し、精細な検査の結果右腎下極の結核を決定した症例を報告した。以上2例共膀胱の変化は非特異性の変化であつた。

18. 腎結核に対する Pyrazinamide, I.H.M.S.
併用療法、特に組織学的所見について 河崎
屋三郎・松本鎌一・近小弥太・小坂信生 (金
大)

既往に結核化学療法を受けていない腎結核の4症例を選び、PZA-IHMS 併用療法を施行し、臨床経過及び剔除腎組織学的所見を観察した。自覚症、尿所見は1週前後に改善し始め、爾後漸進的に好転する。尿中結核菌陰性化を示すものもあるが、剔除腎空洞内容より結核菌を検出し得る。膀胱鏡所見に於て定型的結核病変を示すものも2、3週後に消失乃至軽快する。組織学的には腎病変が軽度で投与日数が長い程著明な治癒傾向像を示す。従来の三者併用群との間に優劣の差はつけ難く、又本療法に特異的な組織像を認め難い。長期連用を必要とする場合は、肝障害発生を考慮して投与量に一考すべきである。

19. 腸尿瘻を形成した両側腎結核例 田村峯雄
・山口武津雄 (大阪市大)

10年前より両側結核性腎膿腫の診断の下に化学療法を行つて来た本年25才の女子に於て、2年前より萎縮膀胱となり、更に1日10数回の水様下痢を来した。入院諸検査の結果右腎と十二指腸との間に尿瘻を形成し、左腎は閉塞性腎膿腫であることを知つた。この患者に就て約2年間の腎機能と血液電解質等との関連に就て述べた。

20. 両腎結核の治療について 稲田 務・仁平
寛己・酒徳治三郎・杉山喜一・片村永樹・山崎
巖 (京大)

最近、結核症の一般的な減少のなかで、両腎結核の比率が増加して来ている。われわれは、昭和27年より32年6月までの5年半に、教室を訪れた患者について観察したが、腎結核総数の間で27年に18.7%であつた両腎結核が32年には59.4%にふえている。

次に、両腎結核をい1). 1側腎摘後に発生した残腎

結核、2) 初診時までには両腎結核のもの、3) それの高度のもの、4) 尿管狭窄、萎縮膀胱による水腎症にわけ、それぞれのグループで3~4の症例をあげ、化学療法のみと、化学療法と手術療法の併用等、複雑な内容の治療についてのべた。

これらの詳細については、原著でもつて、「泌尿器科紀要」に報告する。

21. 囊腫腎に併発した腎結核 後藤 武 (名
市大)

患者は43才、女、無職。検査の結果左側腎は結核にて高度に崩壊し右側腎は尿管狭窄の為水腎を形成、その為一般状態は不良、腎摘出に先立ち先づ右尿管瘻術を施行、全身状態好転した後左腎摘出術を行った。摘出腎は肉眼的には表面凹凸を認め、剖面はCysteを形成し更に結核病変で蔽われていた。

22. 婦人科疾患に続発した腎膿腫の3例 田村
峯雄・宮垣信海・豊島 淑 (大阪市大)

第1例。26才、家婦。第2回目妊娠3ヶ月で中絶の為子宮掻爬術を受け、当科初診時は第3回目の妊娠で5ヶ月である。第2例は41才、家婦。第3回目妊娠3ヶ月で中絶の為子宮掻爬術を受け、その4ヶ月後に第4回目妊娠を見て、当科初診時前4ヶ月に男児を分娩している。第3例は31才、家婦。当科初診前6ヶ月、右卵巢膿腫摘出術を受けている。この3例は諸検査の結果それぞれ腎膿腫と診断し、腎摘出術を行った。その病理所見より原発性膿腫腎と診断した。この原因に就ては他に求め得ないので上記の婦人科手術に基くものと考へた。

23. 感染性水腎症の研究 (予報) 岡 直友
・加藤一也 (名市大)

感染性水腎症の保存的治療法の予後を左右する次の如き諸因子につき目下研究中。1) 上部尿路の感染菌について：尿管カテーテル法、尿管穿刺、腎穿刺による濁濁液の培養15例の結果種々なものを認めたが、症例少数にて頻度等につき論ずるに至らず。2) 感染性水腎症の概要：上部尿路の結石(内4例珊瑚様結石を含む)9例、尿管圧迫2例、尿管狭窄(内3例結核、先天性のもの1例)があつた。術前尿強度濁濁、腎機能著明に侵されたるも、治療後の成績は半数が極めて良好であつた。但し尿濁濁は相当著明なもの4例存する。3) 腎の組織学的所見について：上述9例の変化強と思われる部分の腎切片を組織的検査の結果間質の細胞浸潤あるもの6例なるも、4例は病巣性、糸球体

は萎縮、硝子化、細尿管は全例拡張、上皮は圧迫、萎縮、瀾濁変性を認め、内3例は諸変化高度。4) 腎機能の治療による推移：短時日にて相当改善された。一見著明な感染ある水腎症でも、組織的に炎症像は病巣性のことが多く腎の保存療法にて充分恢復し得る。

24. 交叉性腎変位兼尿管膀胱外開口の1例 相馬 徳三・西村幹夫（大阪府済生会中津病院）

30才の女子 幼時から定型的な尿管性尿失禁があり、前庭部で外尿道口の右に尿管が開口し、膀胱鏡で右尿管口を発見出来ず、色素排泄も認めず、静脈性腎盂撮影で右腎盂像が欠如しているため、某婦人科医に右腎は發育不全で、右尿管が前庭部に開口していると診断されたが、尚詳しく診察を希望して来院す。初診時逆行性腎盂撮影を行うと、正常な左側腎盂像の下方で、第Ⅲから第Ⅴ腰椎に亘って囊状に著しく拡張した腎盂像と思われる陰影を認め、右尿管は前庭部から正中線を越えて他側に変位している交叉性腎変位症であることが判明し、単純法によって左尿管膀胱吻合術を施行した1例に就て報告す。尚本例は左拇指欠損症を合併す。

追 加 楠 隆光・井上彦八郎（阪大）

症例は20才の女子で、約5年程前に突然発熱があり、その後2ヶ月にして排尿とは無関係に、外陰部が尿により湿潤する様になって来たので来院した。静脈性腎盂レ線像、Pneumoretroperitoneum及び手術所見より略図スライドの如き所見を示した。治療は異常開口尿管を膀胱内に新移植したが、発熱及び尿瘻形成のため、半腎切除術を施行治癒せしめた。尚本例は新潟大学に於ける症例で小林鴻氏が昭和29年4月発行、臨床皮泌、第8巻、217頁に報告している。

25. Retroperitoneal encysted hematoma 外松茂太郎・柳田伍平（京府大分院）

山〇明、2才男、初診32年4月30日、即日入院。4月27日来、某病院で貧血の診断で加療中、4月29日に突然、頻回の嘔吐、著明な腹部膨隆、全身状態悪化を来し、既存の右側陰囊ヘルニアは腹部膨隆と共に消失。貧血著明で腹部は著明に膨隆、緊張しやや硬いがDéfenceなく、左腹部穿刺は腹腔前で純血性の液を得。後、腹部膨隆、緊張の減少につれ、次第に限局しかつ硬度を増す波動性小児頭大瘤形腫瘍を右腹部に触知し、X線像も同部に同様の陰影あり腸は全く左側に圧排。囊腫壁の厚さは2~5mm、暗赤褐色液約1000ccおよび凝血を入れ、腹壁、腹部大動脈周囲と

密に癒着をみ、この部を残し摘出した。組織学的に壁は幼弱結合組織よりなり、内壁に上皮および内皮細胞を見出さない。

26. 所謂特発性腎出血に関する研究

第4報：自律神経系に関する臨床的並に実験的研究 稲田 務・仁平寛巳（京大）

特発性腎出血27例に自律神経系の薬理学的検査を行ってV S型10例、S型9例、V型7例、O型1例の結果を得、少数例ながら自律神経刺激剤の投与によつて血尿の誘発或は増強を来すものを認め、遮断剤の投与によつて27例中止血4例、軽減9例の結果を得た。自律神経異常と腎血流障害との関係が注目されているが、吾々は実験的に家兎の腎神経を遮断して糸球体毛細管或は間質毛細管の拡張、血液充満を認め、之にadrenalin 長期投与によつて尿細管変性、間質内出血を来した。又一側腎神経遮断家兎に腎毒性物質の少量を投与すると、遮断側に受ける変化が健側に比して甚だしいことにより、腎血流障害時にはかかる物質によつて障害を受けやすいことを知つた。

27. 精囊腺の生物学的研究

第1報：精囊腺の妊孕に及ぼす影響に就て 水口宗男・加古 賢（大阪医大）

精囊腺の機能に就いては生理学的に1) 分泌機能、2) 貯精作用、3) 吸収機能、4) 性衝動の惹起機能等の諸説があるが、現今未だ充分に解明せられていないと云い得ない状態にある。著者は精囊腺の妊孕に及ぼす影響に就て観察中であるが、まず成熟海猿雄5匹を無菌的開腹手術を施行精囊腺をその根部に於て結紮切除し、該雄海猿は精囊腺摘出後1ヶ月間嚴重に隔離飼育し、又これと交配せしめる成熟海猿雌5匹は約1ヶ月前より隔離せしめたものを用いた。此れと同時に対照とする成熟海猿雌雄5匹を交配せしめ、以て精囊腺摘出の海猿が如何なる妊娠率を示すや否やを検し興味ある結果を得た。

28. Inter Sex に関する研究（第1報）性染色質について 兒玉正道（阪大）

演者は次の諸細胞核のSex chromatinの検索を行つた。1) 皮膚細胞核、2) Buccal smear、3) 血液中中性好性白血球のdrum stick、4) 尿道上皮細胞核及び5) 骨髓穿刺による骨髓芽細胞のSex chromosomeの電子顕微鏡による検索を行つた。正常男子38例、女子19例につき調査するに1) では男子1~7%、平均4%、女子53~64%、平均55%、2)

では男子2~17%, 平均5%, 女子では52~66%, 平均53%及び3)では女子は平均186ヶの白血球に6ヶみられた。

以上の方法で Inter sex の患者について調べた所、

1) 真性半陰陽では Sex chromatin (-) 2) Klinefelter's Syndrome では Sex chromatin (+) 及び 3) Gonadal agenesis では Sex chromatin (+) であった。

質 問 宮崎 重 (京大)

1. Sex Chromatin の総てが Sex chromosome そのもののみに由来するとは考えられないが、此の点演者の御考えを伺いたい。

2. 第2例の Klinefelter Syndrome の Gonadotrophin 値は如何。

3. Klinefelter Syndrome の時は Sex chromatin positive なものであると考えていますか。

答 児玉正道 (阪大)

1. Sex chromatin は XX の Sex chromosome の凝縮したものであろうと考えている。

2. 尿中 Gonadotrophin は64マウス子宮単位であった。

3. Klinefelter's Syndrome の Sex chromatin は positive だけとは考えていない

再 び 宮崎 重 (京大)

所謂 Sex Chromatin の総てが Sex Chromosome そのもののみに由来するとは考えられない。

29. 泌尿器疾患の腎における水及び電解質の再吸収について(予報) 小田完五・雨森 幹 (京府大)

内因性クレアチニン・クリアランス (CcR) から近似した糸球体濾過値が求められ、更にその際測定した尿中 CR と血中 CR との比 (u/p) から腎における水再吸収の状態を知ることが出来る。よつて腎結核、尿路結石症、前立腺肥大症等2~3泌尿器疾患について CcR 及び u/p を測定した結果を報告する。

健康者の CcR は 113.4 ± 11.4 cc で、上記疾患々々のあるものは明らかに有意の低値を示し、殊に残腎結核患者において顕著であり、両側上部尿路結石患者及び前立腺肥大症患者がこれについて低値を示した。

Vorhald の稀釈試験において、u/p は10前後で健康者と患者との間に差が認められなかつたが濃縮時には有意の差が認められた、よつて濃縮時の u/p をも

つて尿管の水再吸収能の示標としたが、これは尿比重法よりもより直接的であり理論的であると考えられる。健康者の u/p は 269 ± 51.1 で上記患者の中 CcR の低値を示すものは u/p も亦有意の低値を示した。

以上の事から糸球体及び尿管の機能を卜する臨床方法として、一定期間脱水状態におかれた際の CcR 及び u/p を測定することを強調したい。

質 問 大村順一 (岡大)

前立腺肥大症における GFR, U/PR の低下をどう解釈しておられますか。又いつも御研究になつている電解質、ことに Cl, NH_4Cl との関係は如何ですか。

答 小田完五 (京府大)

電解質の再吸収については別の機会に発表するが、上述の患者群において Na, Cl の再吸収率は健康者群に対し有意の差を示している。

30. 低食塩症候群 岡本重礼・河合恒雄・栗原克康 (横浜市大)

腎下垂兼腎硬化症の患者に術後併発した low salt syndrome について述べた。特に食塩投与前後に於ける血漿中 Na 及び Cl, NPN, 水分の平衡、体重の変動について観察した。

31. Balloon Catheter の泌尿器科的応用 金沢 稔・瀬川陽一・西川恵章 (和歌山医大)

私達は Balloon catheter を作り、これを膀胱鏡にて尿管に挿入して片腎機能検査のための採尿をなし、正常人に於いてそのクリアランスが通常の尿管カテーテルの場合の如くカテーテル周囲よりの尿流失なきため正当な値を得、又病的例に於いてその低下を明らかにし得た。他にこの Balloon catheter を用い腎盂、尿管逆行性撮影に多々の利点あるを知り、排泄性腎盂撮影の場合にも尿管を内部より圧迫することが可能である事を確かめ、此れ等のレ線像をも同時に供覧した。

質 問 仁平寛巳 (京大)

balloon catheter による分離尿クリアランスについて：尿管カテーテル法に際してしばしば経験する如く、balloon catheter による採尿時に血尿が起ることは充分考えられるが、尿中に血液を混じることによつて起るクリアランス値の誤差は無視出来る範囲内のものなりや。

答 金沢 稔 (和歌山医大)

軽い血尿に対するクリアランス値の誤差は無視出来るものと思う。

32. われわれの行っている前立腺剔除術, 特にキシロカイン仙骨麻酔による前立腺剔除術について
原口泰彦・井口久男・山脇春夫 (北野病院)

我々の所では最近前立腺剔除術は全例キシロカイン仙骨麻酔で行っている。手技の容易さ(高年者では腰麻の困難な場合が多い), 効力, 副作用等の点で腰麻より優れているからである。

又手術方法は恥骨上方式に2~3の独自の改良を加える事により最も容易に最良と思われる結果を得ている。最近の5症例は全例手術時間30分以内, 輸血量0~200 cc, 治癒期間10日以内である。

33. 尿失禁手術治験例 (i). 急迫尿失禁兼膀胱腔瘻兼發育不全腎所属尿管の異常開口, (ii). 膀胱腔瘻, (i). 尿道腔瘻兼急迫尿失禁 黒田恭一・和泉俊治・小坂信生・津川竜三 (金大)

(i). 23才家婦。分娩後の加腹圧時の部分的尿失禁及び膀胱充満時の腔よりの尿漏洩を主訴とせる症例で, レ線学的に診断を確定し, 左側尿管剔除術, 経腔的瘻孔閉鎖術並びに Marshall-Marchetti-Krantz 氏手術を一次的に施行し主訴の消失を認めた。剔除腎重量2.0 g。

(ii). 45才家婦。腔上部子宮切斷術(子宮筋腫)後の腔よりの尿漏洩を主訴とし, 経膀胱的閉鎖術により一次的に治癒せしめ得た。

(i). 46才家婦。子宮腔脱手術後の尿失禁症例に對し, 経腔的瘻孔閉鎖術及び Marshall-Marchetti-Krantz 氏手術を二次的に施行し成功した。

34. 尿道下裂10例の治験例 清水圭三・佐藤忠敏・吉川康史・瀬川昭夫・滝上明良 (名大)

尿道下裂の成形術には, 古来より, 諸種の術式が行われているが, 最近, 吾々は10例に主として May-Beck 氏法を試みて相当良好な結果を得たので症例報告をする。

35. 尿路に於ける成形的手術に就いて 金沢 稔・瀬川陽一・前田行造・西川恵章 (和歌山医大)

尿路に於ける成形的手術の特異性とその手術方針を述べ, 尿道狭窄に対する Pull-through operation, 多発性前立腺結石に対する前立腺全剔除術に伴う膀胱

牽引法による頸部・尿道膜様部吻合術各1例, 尿管膀胱吻合術6例, 廻腸膀胱形成術2例, 尿管皮膚移植術に於ける Ureter penis 形成術2例, 両側尿管・廻腸・膀胱吻合術1例, 尿管端々吻合術2例(内1例は大静脈後尿管), 腎盂成形術5例の経験を述べると共に各手術の術式の概略を説明し, 又後療法の忽諾にすべからざる事を強調した。

36. 尿管小腸膀胱吻合術に依る尿管腔瘻の治験例
清水圭三・佐藤忠敏・浅井 順・吉川康史・牛田隆雄 (名大)

患者は50才, 女子。子宮筋腫手術施行後約2ヶ月半して腔より尿の不随意的に漏出するのに気付き, 約2年後当科を受診, 左側尿管腔瘻と診断。左腎機能は相当障碍されている如くであるが尿の漏出相当多く, 之の治療として尿管小腸膀胱吻合術を施行し全治を見た例を報告し, 併せて尿管腔瘻の治療として腎を極力保存的に取扱うべき事を強調す。

追 加 楠 隆光・井上彦八郎・生駒文彦 (阪大)

1953年以来, 新潟大学及び大阪大学泌尿器科に於いて行われた尿管・小腸・膀胱吻合術の総数は11例で, うち尿管腔瘻7例である。尿管腔瘻はすべて子宮全剔除術後のもので, 右尿管腔瘻3例, 左尿管腔瘻2例及び両側尿管腔瘻2例であり, 施行せる手術は右尿管・小腸・膀胱吻合術3例, Foret 式手術3例, Scheele 式手術兼両側尿管・小腸・膀胱吻合術1例で, 術後尿失禁はすべて完全に治癒した。

尿管・小腸・膀胱吻合術による血液化学の変動は, 手術侵襲によると考えられるもの以外に病的なものなく, 退院時の血液化学は正常であり, 現在までの遠隔成績は死亡11例中2例(18.2%)で, その死因は癌疾患及び腸閉塞が各1例であつた。

37. 臨床に應用した各種の人為膀胱設置失敗例の教訓
原田直彦・小田和夫・福山謙四郎・小山育二・飯田保夫・塚崎義人 (大阪市大内科)

数年来, 私どもは各種の人為膀胱に関する実験を行い, その成績に基づいて臨床に應用してきた。そのうち失敗した数例についてその原因を追求し, つぎの平凡であるが貴重な結論をえた。

1. 尿瘻は必要である。2. Reservoir より Conduit がよい。3. Ileum bladder より Regenerated bladder がよい。4. Extraperitonealizi-

on は必要である。5. Subtotal cystectomy は Total cystectomy より優秀である。

以上の教訓から、今後の優秀な人為膀胱の完成は Subtotal cystectomy によつて残された膀胱壁からの再生に期待したい。

追 加 楠 隆光 (阪大)

私は実験的研究及び臨床例の経験から、膀胱全切除術を出来るだけ避けて、膀胱部分切除術を施行している。そしてこれらの経験から全膀胱切除術と亜全膀胱切除術とは異なるという演者の意見に賛成する。

38. 糖尿病患者の泌尿器科的手術 新谷 浩
(関西医大)

51才～74才の5例の糖尿病患者に、膀胱全切除術、膀胱部分切除術、前立腺切除術、腎切除術を施行した。血糖(空腹時)は110mg/dl～240mg/dlで各例食事療法とインシュリン注射を併用し、2例は糖尿を消失させ、3例は軽減させて手術を行つた。1例は小なる瘻孔を形成し、1例は術後10日目に肺栓塞にて死亡したが他の3例は手術創の感染もなく治癒した。アセトン尿が無ければ糖尿は多少あつても手術に悪影響は無い様に思われる。1例術後に急激に糖尿が増加した症例があつたことは注意すべきである。

39. 泌尿器外科手術に於ける出血量と輸血量に関する問題 楠 隆光・岩佐賢二・大久保達也
・柏井浩三 (阪大)

1957年6月26日以降最近まで経験せる泌尿器外科手術83例(腎切除術23例、腎部分切除術5例、膀胱全切除術2例、前立腺切除術14例、前立腺全切除術4例、その他20例)について、術中出血量及び輸血量を測定、出血量は重量法で測定した。平均出血量の最も多かつたのは膀胱全切除術 655 cc 次いで前立腺全切除術の 429cc であり、これらに次いで出血量多く術中輸血を必要とする術式は前立腺切除術、腎切除術、膀胱部分切除術等である。術中輸血は、術中出血量に応じて直ちに行わねばならず、この点より出血量測定は重量法が簡易で且つ有用であると考えらる。

質 問 仁平寛巳 (京大)

骨盤腔臓器外科に於いては術後血栓症の発生が少なくないとされ、且つ高齢者に於ける大量輸血はこの傾向を助長すると言われている。吾々は最近2年間に2例の肺栓塞症による死亡例を経験したので、手術例について年令、術中出血量、輸血量その他について調査し

たが、死亡例には一定の傾向を認めなかつた。

血栓症の発生と輸血量との間に一定の傾向を見られませんでしたか。

答 岩佐賢二 (阪大)

Thrombose は本年始めより我教室で1例経験したのみであり、輸血量の多少と本症の発生については特別な関係は見出さなかつた。

質 問 片村永樹 (京大)

出血量の問題を論ずるにあつては個体差があり、循環血液量との関連が重要である。この点の見解をうかがいたい。

答 岩佐賢二 (阪大)

循環血液量は5例に於いて測定、その中2例は術前及び術中の血流量を測定したが、得られた数値と出血量及び患者に対する Belastung の問題については一定の関連を見出し難い。これらの問題については我々も更に症例を加えて検討を行う予定である。

40. 精囊隣接臓器疾患にする精囊レ線撮影法の応用
後藤 薫・酒徳治三郎・友吉忠臣 (京大)
泌尿紀要第4巻第3号参照。

41. 小胃による代用膀胱の実験的研究(第3報)
渡辺 克・尾関信彦(岐阜医大)

前回の総会に於いて吾々は実験動物(犬)を使用し、小胃膀胱造設例を報告したが、其後例数を重ねて次の様な知見を得た。即ち 1). 小胃は尿成分の再吸収少く、血液電解質には著変を認めない。2). 小胃を代用膀胱として使用しても本来の胃としての分泌機能には大なる影響なく、組織学的にも著変を認めない。3). 小胃からの酸性胃液の分泌は上行感染を防止するものと思われる。4). 尿管小胃吻合部に狭窄さえ発生しなければ腎機能は侵されず長期の生存が可能である。5). 排泄性腎盂撮影では正常の腎盂尿管像を示し、又正常の腎機能を示した。6). 蓄尿可能である。7). 手術後早期の死因としてイレウスが認められ、又術後一定期間後の死因として尿管吻合部狭窄による腎機能障害が認められた。8). 手術々式も犬の実験例ではあるがそれ程煩雑ではない。以上の実験結果より、小胃は代用膀胱として多くの利点を有し、人間にも充分適用し得るものと信ずる。尚8耗映画により本法の手術々式を供覧した。

42. レ線映画による游走腎の上部尿路排尿運動の研究 清水圭三・三矢英輔・須山敬二・前川昭・蔡 衍欽 (名大)

游走腎患者 7 例 11 患側の逆行性腎盂レ線像を 16 ミリフィルムに収め、これを拡大、一コマ毎に腎杯、腎盂、腎盂尿管移行部の収縮を観察した。特に臥位、立位時の変化を比較した。腎杯より尿管移行部の連続した収縮で見ると立位で 7 例中 2 例 3 患側に収縮期の短縮著明で、3 例 4 患側は収縮期の延長を見た。この収縮時間の延長は尿管の屈曲、或は游走度の強い症例であつた。上腎杯より尿管移行部までの収縮時間は臥位で 3.8~11.8 秒、立位 2.4~10.4 秒、週期は臥位 6.5~17.1 秒、立位 5.3~21.0 秒であつた。腎游走に伴う尿路内圧の変化と蠕動運動の変化と関係があつて、その程度により種々の収縮運動が見られるものと思われる。

43. レ線映画による膀胱排尿運動について 清水圭三・浅井 順・牛田隆雄・須山敬二・牧野昌彦 (名大)

吾々は第 44 回総会に於いて既に正常膀胱排尿運動につき報告したが、今回は異常膀胱運動につき映画を供覧する。第 1 例、外傷性尿道狭窄、男、排尿時膀胱頸部拡張著明である。第 2 例、膀胱癌、男、左側壁に浸潤性に腫瘍が増殖している為排尿に際して右側は運動するが左側はあまり運動しない。第 3 例、膀胱と周囲との融着により異常排尿運動を行える例、女、2 年前子宮筋腫にて手術、その後陰尿瘻を生ず 本科にて回

腸膀胱吻合術、尿管回腸吻合術を行つた。排尿を命ずると左側膀胱頂部は運動性が乏しい。排尿を中止せしめると一「コマ」で横軸に長い膀胱となる。第 4 例、前立腺肥大、男、排尿困難があるため膀胱壁はいろいろ運動するが排尿に長時間を要する。手術後では排尿を命ずると先づ前立腺のあつた空洞を満し、その後排尿される。第 5 例、萎縮膀胱、男。

44. 前立腺腫瘍に対する Honvan の使用経験 大矢全郎・山田瑞穂・西浦 力 (国立京都)

合併症のため或は絶対に手術を肯んじない高齢者の前立腺腫瘍に対し、新化学療法剤 Honvan を使用しかなり有効と思われた。即ち 2 例はかなり有効 (20 本—5000 mg 以上使用)、3 例はほぼ有効 (5 本—17 本使用) で、3 例は無効 (3 本以下使用) であつた。注射により血清蛋白の減少、赤沈の促進、肝臓機能検査の血清 Co 反応の左方化を認めた。副作用としては会陰部の電撃様感、食思不振、悪心、嘔吐が比較的多い。3 例は下肢に浮腫を来たした。副作用が甚だしくて 2~3 本が中止するに至つた症例では貧血が著明であつた。有効と思われる症例では先ず自覚症が軽減され、次いで他覚的にも腫大前立腺の縮小、境界の明瞭化、板状硬の弾力性化等を認める。手術を第一とするが、それが行えない場合癌でも肥大症でも 10~30 本注射 (始め毎日、漸次間隔をおいて行く) を試みてみる必要があると思う。

講 演 Prof. H.Drückrey(Freiburg)